

## 原子力発電施設放射線業務従事者を対象とする死亡追跡調査

○笠置文善

(放射線影響協会 放射線疫学調査センター)

放射線影響協会の放射線疫学調査センターは、低線量・低線量率の放射線が人体に与える健康影響についての科学的知見を得るために、個人被ばく線量が判明している原子力発電施設等で放射線業務に携わる従事者を対象として死亡追跡調査を 1990 年以来実施している。平均 10.9 年の追跡人年、平均 13.3mSv の累積被ばく線量をもつ約 20.4 万人の 2007 年までの調査から、白血病を除く全悪性新生物の死亡率に累積線量の増加にともなう有意な増加傾向がみられた。しかしながら、喫煙などの生活習慣要因と累積被ばく線量は正相関があり、このことは、累積線量との間に観測される有意な関連に生活習慣等の交絡が入り込んでいる可能性を示唆している。今までの追跡調査からは、低線量・低線量率被ばくの死亡への影響について明確な証拠を提供し得ない状況にあり、追跡対象集団の平均観察期間は未だ約 11 年であり、死亡率は約 7%であるので、確かな調査結果を提供するためには更に観察を継続していく必要がある。

